

南支に戦つて

愛知県 木下照雄

―入隊はいつでしたか―

私は昭和十二年徴集兵で兵隊検査の結果第一乙種合格でした。当時は甲種合格の者だけが現役入隊でした。第一乙が現役入隊になったのは大戦になってからです。

昭和十三年九月十五日に第一補充兵召集で豊橋歩兵第十八連隊の補充隊に入隊しました。一カ月間歩兵としての基礎訓練を受けた後、衛生兵要員として一年間の陸軍病院における衛生兵教育を受けたのです。

―衛生兵の教育はどうでしたか―

歩兵一個中隊約一八〇名のうちで二名だけが衛生兵です。あとで四名に増えましたが、寂しかったですね。

教育中の思い出は、なんといっても昭和十四年の四月中旬でしたね、支那事変がさかんな時でした。約二五〇くらいの「ダルマサン」部隊と言われた負傷兵の

一団が後送されてきたことです。強いショックでした。私も学生のころ聞いたことがあります。両手、両足が無いそうですね。声はすれど姿が見えぬで、「タル」の中をのぞいたら兵隊さんがいたという噂でした。

上海の呉淞（ウースン）という所に、郷土部隊の歩兵第六連隊が敵前上陸したんですが、十重二十重（とえはたえ）に張りめぐらされた鉄条網で待ち構える敵の機関銃にやられ、死傷者続出、その敵弾が鉛で作ったダムダム弾ですから、鉛毒が全身に回る前に手足を切られれば命にかかわるということで、気の毒に手足を切られた兵隊が続出したのです。負傷者全部を収容しきれず、海岸に近い所にいた負傷兵だけが助けられたそうです。だから「ダルマ」さんみたいな気の毒な姿で各地の病院を経て豊橋に來られたのです。その人たちの、その後は分かりませんが、その話は当時全国に広がったものでした。

私の看護した九州出身の兵隊さんは肺損傷で寝たきりでしたが、たまたま自分で便所に行くんだと無理して歩いたら、途端に口から血を吐いて倒れて大騒ぎに

なりました。その兵隊には在院中、一度も家族の見舞いはありませんでした。事情を聞くと家が貧乏で九州から豊橋までの汽車賃が払えず、来たくとも来られないとのことで全く気の毒なことでした。病院勤務の看護婦さんも召集された人たちで、家庭を捨てて勤めていました。朝早くから夜遅くまでの勤務ですから大変でしたね。

病院での教育は軍隊ですから厳しかったですね。朝八時から夜五時までの教育でした。ごかれました。夏なんか、疲れてコックリでもしようものなら同じ二つ星の先輩から鉦つきの上履きでビンタをはられ、頬が一週間くらい腫れ上がり、飯も満足に食べられなかった時は同じ階級の者にやられただけに癪にさわったね。

一年間の衛生兵教育中に、あとから歩兵の補充兵が次から次へと入って大阪方面へ送られて行きました。初めの頃は六カ月間の教育でしたが次第に三カ月になり、戦局拡大につれて、終わりには一カ月の速成教育で戦地に出て行きました。

昭和十四年の夏、第二九連隊の動員編制が始まり、私は第六中隊に配属されました。私だけが病院に取り残されたような気がして、早く戦地に連れて行ってくれと志願していただけに、やっと人並みになった気がしましたが、独身者はよいが所帯持ちの兵隊にしてみれば家族と生き別れですからね、今思うと大変だったと思います。

出征間近になったころ、連隊演習が行われました。防毒面着装で夜間から翌朝まで走らされました。一時間もすると汗が防毒面のアゴのところシツカリ溜るんですね。息は苦しくなり、たまらずアゴを浮かすと汗がドツと抜けて息が少し楽になるんですが、伴走している古兵がすぐゴツンと叩く、全く苦しかったですね。

翌朝、隊長の講評があつたんですが、その途中バタバタ倒れる者が続出し、一八〇名の中隊で、三分の一の六〇名が倒れる始末でした。私は直ちに背囊を外して手当をしましたが、水を頭からぶっつけたのが一番ききました。体格の良い幹部候補生でも訓練が厳しい

せい胸膜炎になる者が多かったですね。

—ところで戦地はどちらへ行ったのですか—

南支でした。昭和十四年十月十四日豊橋を出発しましたが、老若混成の部隊ですから家族多数が見送りにきて、今生の別れを惜しむ情景には思わず涙が出たのを覚えています。大阪港から二、五〇〇トンの輸送船に乗り、巡洋艦「摩耶（まや）」に守られ南支に向かいました。野砲隊も同乗したので馬もいて、船倉が二段の棚になっており、二、五〇〇人の兵隊は頭を上げるとゴツンと当たる高さのため頭を下げて坐っていました。兵隊の中には漁師もいましたが、流石さすがに船には強かったですね。他の兵隊は飯をともに食ったのは乗船した一日か二日くらいで、あとは船に酔って動けない、「カユ」にして寝ていました。ほとんど船倉の中ばかりで便所に行く時だけ外の景色を見る。十月というのに三〇度を超す熱さ。

足が弱くなり上陸してから半日の行軍で引っくり返る有様です。漁師上がりの兵隊は平気で飯をたらふく食い船旅を楽しんでいるふうでした。

八日間、船に揺れて広東の近くの黄浦に着きました。敵前上陸かと緊張しましたが、海岸を眺めると作業している工兵とおぼしき兵隊が帯剣姿なのを見て安心しました。

輸送船から鉄船に乗り移り、それから栈橋みたいな所に飛び乗るのですが、完全装備が三〇キロあるのになかなか飛び移るのは困難でした。失敗して海中に落ちると泥の中に沈んでしまい、助けることができなかったので足がすくみました。今だから話せますが、ある准尉さんが大阪乗船寸前に盲腸になり入院し、退院した時は部隊は出発した後で残留しましたが、一年後召集され朝鮮海峡で乗船が沈没し、死んでしまいました。あの時一緒に行っていたら死なずにすんだのに、と思うことがあります。

南支では中隊長以下全員がマラリアにやられ、夜は蚊に刺されないように蚊帳かやを吊り、昼間は防蚊面をかぶりました。現地の人には免疫性があり、万一マラリアにかかっても我々よりも軽いのです。衛生兵の持っている薬はアテブリンという苦い薬ですが、これを投与

すると効きました。注射薬はバブロンというものだが入手困難で少ししかなかった。あとはカンフル剤、健胃散、メントリンくらいでした。新しい薬はなかった。私の上官は二十八歳の小島少尉で、名古屋で小島医院を経営していたので自費で名古屋から薬を送ってもらっていました。

上陸してから夜間行軍で四日目に新会県江門に到着、江門地区警備隊として付近の警備につきました。憲兵がおり規律はきびしかった。

―戦鬪の状況は―

付近の掃討作戦は、しばしば行われました。「汗を流して、血を流すな」が訓練のモットーでした。散開して前進が鉄則ですが実戦となると中隊長を先頭に、ゾロゾロ後に続くものだから中隊長が横に広がれ！と怒鳴る。その時は散らばるが敵弾が飛んでくるようになる。とまた固まってしまう。実戦はなかなか訓練どおりになりませんね。

―相手は蒋介石軍ですか―

蒋介石軍の中でも最精銳の部隊とか言われています

た。山岳地帯に入ると山の稜線を歩くと必ずやられました。稜線から少し下を行かないと危ない。だけどそこは歩くのが大変なものだからどうしても稜線に出してしまうのです。

―支那兵の装備は―

支那兵は傘と焼米と銃だけです。非常に身軽でした。良口作戦が昭和十五年五月から一カ月間ありましたが、これはえらかった。

ちょうど雨期にあたり、雨が毎日シヨボシヨボ降り続きました。雨合羽を着けていても、蒸れてとても着ておられん、夜寝る時は平坦部は夜襲されるので頂上で寝ます。中隊長は地図だけを頼りに作戦命令どおり指図された場所、定められた場所、定められた日時に行かねばならず大変でしたね。

山には敵のトーチカが待ち構えている。物凄い手強い相手に手こずりながら、やっとトーチカを陥して内部を見ると足を鎖で縛られて死んでいる。死ぬまで抵抗していたのですね。白兵戦になり山の頂上の奪い合いになり激戦でした。

山口少尉（二十三歳）が腹部に負傷して介抱を命ぜられたが「殺してくれ」と言つて動かない。後退するにも動かないので仕方なしにピンタを食らわしたら怒つたが、なんとか動くようになったので後退した。時間がかかりました。

作戦中の行軍で小休止で寝ることがあるが、特に夜間行進中は「寝るなら道の真ん中へ寝ろ、道端へは絶対に寝るな」とやかましく言われましたよ。

道の横に寝ると置き去りにされるのです。道の真ん中だったら踏んずけられるから……（笑い）。いやでも目が覚めますよね（笑い）。私も道の横に寝ていて置き去りにされ追及するのに三日もかかった苦い経験があります。作戦中は、どの兵科もつらいですが感心したのは工兵でしたね。六人がかりで鉄船を担いで山越えの行軍にビックリしました。肩から出血して担いでいるので聞きましたら、「山の向う側にある川の渡河作戦に使うので担いで行くのだ」とのことでした。

― 負傷者の手当は―

担架の無いときは手ごろな木の枝を二本切つて、そ

れを軍服の上衣の袖に通して代用しました。野戦病院に収容しても重傷者は、あと回しです。

助かる見込みのある軽傷者が優先です。気の毒だが助かる見込みのない重傷者に手間取っていると助かる者も助からないと軍医が言つてました。夜間行進中、小銃の暴発で腹を撃たれた兵がいましたが、盲貫銃創で助かる見込みがない、苦しむのでカンフル注射してやつたけれど、一時効くだけで苦しみなながら翌朝死亡しました。

師団作戦が終わつて帰るとき、鶏流閑という所で側衛尖兵で出ることになり、重機関銃を馬にくくり付け無線隊、第五中隊、第六中隊の順に出発寸前、前方の田圃から待ち伏せ攻撃を受け馬が驚いて逆走してくる。無線は取られ、近くの竹林に逃げ込んだ。曳光弾が気味悪かった。約三十人が竹林で持久戦を覚悟しました。

敵が「スズキジョウトウヘイ」と呼び掛けてきた。私の他にも鈴木と名乗る兵隊がいた、それがウツカリ顔を上げたら撃たれた。敵もなかなか考えていました。

ラツパ手が私の十五メートル先でドタツと倒れ込ん

だので足を持って引きずってきたらアゴに擦り傷があるだけで、ショック死でした。

第五中隊の衛生兵は頭に敵弾を受けたけれど、鉄兜の内側を三回転して外に飛び出していったので無事だった。珍しいのでその兜を記念にもらってきたことがありました。

無線を取られたので連絡が取れず三日間不安でした。撃たれた馬は動けない。殺すに忍びないので置き去りですが、「ヒヒーン」と泣く「いななき」がいつまでも耳に残りかわいそうでした。やっと連絡が取れ、野砲を撃ってもらって反撃戦に移り、敵を追い払い、戦死者の死体取容に行きましたが、ハダカにされて装具衣服一切持ち去られていました。夏期ですから一日で死体の鼻からウジが出ています。

包囲されたとき、背囊は捨てろと言うのだが、初年兵は天皇陛下からの品物だからの思いが強く捨て切れず、重い背囊を背負っているから動きが鈍く、撃たれて負傷する者が多かったですね。死体の首を標識布に包んで背負って来ましたが、ゴロゴロして背負いづら

く、また重いのには驚きました。茶毘にして持って帰りましたが、遺族には首切ったことは伏せておきました。夜間後退するのに方角が分からず本部の方と思つた敵の支那語にビックリして引き返し、川に沿っていったら崖に突き当たり、よじ登って三日日によろやく本隊に合流できました。

首を包んだのは蠅がたかるとすぐ蛆がわくので、それを防ぐためと背負った方が楽だったからです。骨は竹で編んだ割子という弁当箱に入れて持ち歩きました。行軍中に生水を飲むと間違ひなく下痢ですね。歩いている間に出る物はズボンの中に入れたまま持ち歩く(笑ひ)。十五分間の小休止が一時間ごとにあるから、クリークに飛び込んで洗ってまた歩くの繰り返しで苦労していましたね。同年兵のほとんどが病氣や負傷で入院して中隊は顔の知らない人たちばかりになってしまいました。

―除隊帰還後はどうでした―

私たちの部隊は老若混成だということは最初に申しましたとおりで、昭和十五年六月から十二月にかけて

古い順に帰りました。私ら十二年兵は十二月の下旬で最終でした。同時に中隊長らも交代になりました。

私は帰ってから豊川海軍工廠に徴用で勤めました。

―帰ってから召集は―

私は三度召集を受けましたが二度「赤紙返納」をしているんですよ。

―赤紙返納とは珍しいことですが、どういうことですか―

大戦が始まって二年くらいたったころ、中部第二部隊（名古屋の歩兵第六連隊）に召集されました。二度目の召集だから生きて帰れないと出征祝を芸者の置屋で盛大にやっています。入隊の前日になったら役場から赤紙を返納してくれとのこと。前代未聞のことにアツケにとられ訳を聞きますと、工廠の若者が特攻隊基地要員に転出したので工員不足になったため召集取消しになったのだそうです。

それからまた来しました。今度は名古屋の野砲の第六部隊でしたが、これも赤紙返納でした。だから終戦まで豊川工廠でした。

―豊川工廠といえば、空襲で大損害を受けたのでしょう―

はい。昭和二十年八月七日、ちょうど終戦の一週間前ですよ。私は幸い、分工場にいたので直撃は避けられました。二、五〇〇人が一度に亡くなりました。空襲後片付けに行きました。一カ月間、やられた防空壕を掘って死体收容をやりましたが、死臭がすごかったですね。真つ黒い焼死体がちようど焼けポックリみたいになって正門前に四列に並ぶように置いてありました。警報の間違いが惨事の原因だといわれています。弾薬庫を避けて逃げたのが却って弾薬の落ちる方向に逃げた格好になって多くの死者が出る始末になったそうです。

私のいた疎開工場でも一五〇人の女子挺身隊が働いていました。海軍将校の命令なしに逃げたと怒っていましたが、昼食時になっても帰って来ないので食堂の弁当が余って始末に困り、「大野さん持っていつてくください」と食堂の人から二十人分の弁当を押しつけられて閉口した覚えがあります。